東京都美術館ニュース

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No.471

start

輝くあの人とartの素敵な出発点

Interview

上白石萌音

KAMISHIRAISHI Mone

数々の映画やドラマ、舞台で活躍する上白石萌音さん。俳優だけでなく、歌手、ナレーター、声優、MCと活動の幅は広く、「夢のひとつだった」という美術展の音声ガイドを務めたことも。美術館巡りが大好きだという萌音さんに、アートの魅力や鑑賞スタイルについてうかがいました。

KAMISHIRAISHI Mone is active in movies and dramas, and on stage. Performing in multiple roles as a singer, narrator, voice actor, and MC, she has also voiced the audio guide for the art exhibition, *Yume no hitotsu datta* ("One of My Dreams"). We asked Kamishiraishi, who loves visiting art museums, about the appeal of art and her style of appreciating it.

1冊の本との出会いで開いたアートの扉

私の名前が"もね"なので、クロード・モネにはずっと親近感を覚えていました。父の仕事の関係でメキシコに住んでいた小学生の頃は、壁画をみに行ったり、MoMA(ニューヨーク近代美術館)に連れていってもらったりと、芸術にふれる機会は多い家庭だったかもしれません。

そんな私が主体的にアート鑑賞をするようになったのは、二十歳過ぎから。キュレーターでもあり、アート小説を多く執筆されている原田マハさんの『常設展示室―Permanent Collection―』(新潮社)を拝読し、絵画を取り巻く人々の物語に胸を打たれたことがきっかけです。縁あってプライベートでマハさんと美術展をご一緒した際には、私の知らない絵画の見方や美術館の魅力を教えていただきました。美術館では、展覧会のテーマによって作品の並べ方や作品間の距離、部屋の使い方が変わること、学芸員さんが観客の導線や全体のストーリーを考えた上で、展示空間がつくられていることを知り、すっかり見方が変わりました。年表やパネルの説明をしっかりと読むようになったのも、この頃からです。

荒々しいタッチの絵に心惹かれます

シスレー、ルノワール、セザンヌといった印象派が好きで、なかでもやはり、モネが一番好き(笑)。ドービニーの風景画は、SOMPO美術館(東京・新宿)で拝見して以来、大ファンになりました。

好きな絵は、正面から、斜めからと、さまざまな方向から味わいますが、特に風景画は遠くからみて、近づいてみて、再び離れ…を繰り返します。まず、その景色を実際みているような距離から眺めてみたい。次に近づいて、何度も筆を重ねているタッチをみたり画家のサインを探したり

1冊の本との出会いで広がったアートの世界
絵画と向き合って想像力を
養う〝心の体操〟を楽しんでいます

A single book opened me to the world of art.
I enjoy the "mental exercise" of cultivating my imagination before a painting.

上白石萌音（かみしらいし・もね）1998年生まれ。鹿児島県出身。2011年、第7回「東宝シンデレラ」オーディション審査員特別賞を受賞。初主演映画『舞妓はレディ』で第38回日本アカデミー賞新人俳優賞ほか多数受賞。アニメーション映画『君の名は。』では主人公の声優を務め、数々のドラマ、映画、舞台に幅広く活躍。連続テレビ小説『カムカムエヴリバディ』（NHK）では、初代ヒロインを演じた。初のエッセイ集『いろいろ』（NHK出版）も話題を集める。

して、ディティールを楽しみます。

モネもゴッホも、間近で作品をみると、「一筆一筆、こうやって筆を置きながら描いたんだな」というのがわかるほど、筆跡が残っていますよね。描く情熱がほとばしり、描いたときの息遣いまで時を経ても伝わってくるので、荒々しい筆致の絵画には、とりわけ心惹かれます。

そんな、私の好きな印象派の画家たちが描く風景画や風俗画は、当時は主流ではなく何年も何十年もかかってようやく認められるようになったとか。彼らの作品をみるたびに、「この人たちが絵画の世界に革命を起こしたんだ」と胸が熱くなり、世間の評価と関係なく一途に創作活動を続けたことにロマンを感じます。

去年、こちらの東京都美術館で「ゴッホ展――響きあう魂 ヘレーネとフィンセント」（2021年）を拝見しましたが、事前に関連本を読み、その生涯を描いた映画もみていたので、とても心を動かされました。ゴッホも生前はほとんど認められず、それでもあきらめず、強い信念で新しい表現を追求し続けたんですよね。その生き方に畏敬の念を抱きつつ、作品に見入ったものです。

絵画と向き合うのは“心の体操”

絵には描かれた時の空気や画家の気持ちまで保存されているのか、多くのことを語りかけてくれます。何を語っているのかは、自分の感性でイメージを膨らませるしかないのですが、それが楽しい。絵の中のこの人物は何を考えていたのか、その時社会はどんな状況だったのか。薄暗い絵でも、夜中なのか、夜が明ける前の暗さなのか。ずっとみていると、行ったことがないのになぜだかよく知っている場所だと錯覚することも。そのせいか、私は舞台に立つ時などに、絵を思い出すことが多いです。

例えば去年演じたシェークスピアの戯曲で、森の中をさまようシーンがあったのですが、夜公演の前に美術館に行った時、まさに深い森の絵と出会ったんです。そのとたん「これだ！今夜はこの風景をイメージしよう」とひらめき、実際にその絵を思い出しながら演じました。

こんなふうに、絵画と向き合って想像力を養うことは、私にとって“心の体操”になっていて、表現活動をする上で糧になっています。

里帰りする日本画も楽しみに

東京都美術館は大好きでよく訪れていますが、最近では「クリムト展　ウィーンと日本 1900」（2019年）が印象的でした。ベートーヴェンの交響曲第九番をテーマにした壁画《ベートーヴェン・フリーズ》の再現展示では、音声ガイドで第九を聴くこともでき、五感をフル活用してアートと音楽の融合を堪能しました。

チラシの絵の雰囲気に魅了されて訪れたのは、「ハマスホイとデンマーク絵画」展（2020年）です。デンマーク絵画は初めてでしたが、順路を進むにつれ、北欧に行ったような気分に。“ヒュッゲ”（Hygge：くつろいだ、心地よい雰囲気）を大切にするデンマーク人の価値観やライフスタイルを知ることができ、素敵な時間を過ごせました。あの時買ったポストカードは、今でも部屋に飾ってあります。

美術館巡りは趣味なので、お目当ての展覧会には行きそびれないよう、フェルメール展はいつからいつまで、と会期をメモしておき、早めに訪れるようにしています。そして、ショップでお気に入りのポストカードを買うまでが私の美術館ルーティンです。

この夏開催される「ボストン美術館展　芸術×力」では、日本の歴史的な絵巻などが“里帰り”するというので、早速会期をチェックしました。特にみたいのが増山雪斎の《孔雀図》。空間の使い方が潔く、縦長の紙をバツッと切ったような構図は、その先に何が広がっているのかと想像力がかきたてられます。狭い島国で築き上げた芸術が海の向こうで称賛され、多くの西洋画家にも影響を与えたんですよね。そんな日本画を「おかえりなさい」という気持ちで待ちたいです。

start

Although having many chances for contact with art since a child, I developed my own appreciation for it on reading HARADA Maha's book *Permanent Collection* and feeling moved by her stories of people's experiences with paintings. Thanks to Harada, the way I see and enjoy art exhibitions changed.
I like coarse brushstrokes, charged with the artist's passion to paint, as in works by Monet and Van Gogh. Particularly when viewing a landscape painting, I stand back to see it as if looking at scenery, then move close to examine its layered brushstrokes, find the artist's signature, and enjoy its details.
To stand before a painting and cultivate my imagination has become a "mental exercise" for me and source of energy for my expressive activities. Last year, when performing a scene of wandering in a forest in a Shakespeare play, I went on stage with a mental image of a forest I had seen in a painting just before.
Two recent exhibitions at the Tokyo Metropolitan Art Museum were especially impressive for me: "Gustav Klimt: Vienna – Japan 1900" and "Vilhelm Hammershøi and Danish Painting of the 19th Century." My first encounters with Danish painting, I richly enjoyed learning of the lifestyle and values of the Danes with their concept of "hygge."
I am excited about seeing Mashiyama Sessai's *Peafowls and Flowers*, this summer, at the exhibition "Art & Power: From Pharaohs to Daimyōs. Masterworks from the Museum of Fine Arts, Boston." I await its arrival with thoughts of "welcome home" for art developed in this small island nation that won admiration overseas and influenced many Western painters.

ボストン美術館展　芸術×力
Art & Power: From Pharaohs to Daimyōs.
Masterworks from the Museum of Fine Arts, Boston

会期
2022年7月23日（土）～10月2日（日）

展覧会公式サイト
https://www.ntv.co.jp/boston2022/

＊撮影場所：東京都美術館 佐藤慶太郎記念 アートラウンジ　＊インタビュー：2022年3月17日

展覧会の舞台裏

Creating Exhibitions

7月23日から開催予定の「フィン・ユールとデンマークの椅子」は、東京都美術館ではめずらしくデザインに関する展覧会です。デンマーク家具のデザインの魅力を紹介するとともに、椅子に座ってデザインを体験できる空間をつくることを試みます。展覧会を担当する小林明子学芸員に、開催に至る経緯やみどころについて聞きました。

Rare for the Tokyo Metropolitan Art Museum, "Finn Juhl and Danish Chairs" is an exhibition devoted to design. The exhibition will convey the allure of Danish furniture design and feature a space where viewers can sit on Danish chairs to experience their design. We asked exhibition curator KOBAYASHI Akiko to tell us about the exhibition's background and features.

「家具の彫刻家」フィン・ユールの椅子の魅力に迫る

デンマーク家具にふれ、日々を快適に過ごすヒントを

"Furniture sculptor" Finn Juhl. Discover the appeal of Juhl's chairs. Find hints for comfortable living in Danish furniture design.

空間を変える「家具の力」

世界中で根強い人気を誇る北欧の家具。なかでもデザイン大国として知られるデンマークの椅子は、高い機能性とデザイン性を併せ持ち、一目置かれています。企画展「フィン・ユールとデンマークの椅子」では、そんなデンマーク家具の歴史をたどりながら、ひときわ存在感を放つフィン・ユールの椅子の魅力に迫ります。

この企画の出発点となったのは、2012年のリニューアルオープン時、中央棟1階に「佐藤慶太郎記念 アートラウンジ」が新設されたこと。改修を担当した前川國男建築設計事務所と検討を重ね、「来館者がくつろげる空間となるように」と選んだのが、フィン・ユールをはじめとするデンマークの家具や照明だったそうです。

佐藤慶太郎記念 アートラウンジ（中央棟1階）
Sato Keitaro Memorial Lounge (Central Wing 1F)

「日本の建築と北欧家具の親和性を知り、同時に空間を一変させる家具の力に驚かされました。とりわけフィン・ユールの椅子の座り心地と、彫刻のように繊細なデザインの美しさは抜群でした」と小林さん。このときの経験から、「フィン・ユールの椅子にスポットをあてた企画展を開きたい」という思いが湧き上がったと言います。

北欧ならではの心地よさ

2019年にはデンマークを中心に、北欧4か国への海外研修の機会に恵まれました。「コペンハーゲンにあるデンマーク・デザイン・ミュージアムを拠点に資料調査を行うとともに、伝統的な木工技術を継承する家具工房や家具メーカーのショールーム、祖父母の代からの家具を日常的に使う一般家庭まで、さまざまな立場で家

フィン・ユール
《イージーチェア No.53》
1953年デザイン
織田コレクション（東川町）
撮影：大塚友記憲

Finn Juhl, Easy Chair No.53,
designed in 1953,
Oda Collection
Photo: Yukinori Otsuka

具に関わる方々に会い、家具に対する思いに触れました」。研修を通して得た知見や人脈が、展覧会の準備に大いにいかされたそうです。

「デンマークの家具デザインは、人々がよりよい暮らしを目指すなかで育まれてきたデザインなのです。デンマークと言えば、居心地のよい空間や楽しい時間を意味する“ヒュッゲ”という言葉を思い出す人も多いでしょう。デンマークの人々は、精神的にも物理的にも心地よさを大切にし、それを上手に実現してきました。この展覧会が、それぞれの心地よさについて考えるきっかけになれば幸いです」。

椅子を見て、椅子に座る

椅子の優れたコレクションが実は日本にあることをご存知でしょうか。「それは、椅子研究者の織田憲嗣さんが研究資料として長年にわたり収集してきたコレクションで、現在、北海道東川町によって管理されています」。今回の企画展は、世界的にも名高い織田コレクションを東京でまとめて紹介する初めての機会となります。

「本展では、展示室の一部を使ってデンマーク・デザインを座って体験することのできる特別な空間をつくります。脚を組んだり、体の向きを変えたり、どんな姿勢でもリラックスできるフィンユールの椅子に座ってみたいと思いませんか？ぜひ展覧会に足をお運びください」。

企画展
フィン・ユールとデンマークの椅子
Finn Juhl and Danish Chairs

□会期
2022年7月23日（土）～10月9日（日）
□展覧会公式サイト
https://www.tobikan.jp/finnjuhl

Opening on July 23, the special exhibition “Finn Juhl and Danish Chairs” conveys the allure of Danish furniture with a focus on Finn Juhl.
This project found its start in 2012 when chairs and lighting by Finn Juhl and other Danish designers were placed in the Museum’s newly opened Sato Keitaro Memorial Lounge. “I learned that Japanese architecture shares an affinity with Nordic furniture,” Kobayashi says. “I was also surprised by the furniture’s power to transform the space. Above all, I was impressed by the comfort of Finn Juhl’s chairs and sensitive beauty of their sculpture-like design.
“In 2019, I stayed in Denmark and three other Nordic nations for overseas training, during which time I researched materials and held hearings. I came to understand how Danish furniture design had developed in tune with welfare and social and educational systems. The knowledge and personal bonds I obtained gave a foundation to this exhibition.
“The furniture featured was collected over many years by chair researcher ODA Noritsugu. With the cooperation of Danish furniture and lighting manufacturers, we are creating a space where viewers can sit on chairs to experience Danish design. It will be an exhibition for thinking about chairs and discovering hints for living comfortably.”

人と作品、人と人、人と場所をつなぐ

Art Communication

美術館が作品を鑑賞する場にとどまらず、鑑賞を「体験」として、より深める場所になるように、さまざまなアート・コミュニケーション・プログラムを展開しています。今回は、超高齢社会に対応する「Creative Ageing ずっとび」の活動をご紹介します。

The Museum offers art communication programs designed to take visitors beyond simple viewing to a deeper "experience" of the artworks. This time, we look at "Creative Ageing Zuttobi" activities serving the needs of super-aged society.

シニア世代を対象とした美術館事業

「Creative Ageing（クリエイティブ・エイジング） ずっとび」

Art museum activities for older adults.
"Creative Ageing Zuttobi"

Creative Ageing ずっとび

2021年から新しく始まったシニア世代を対象とした事業「Creative Ageing ずっとび」のロゴと特設サイトができました。特設サイトでは、プログラムのお知らせや活動の様子、国内外の高齢者向け文化事業の取り組みについて紹介しています。

A logo and website have been created for "Creative Ageing Zuttobi" activities for older adults, launched in 2021. The website will feature program announcements and activity scenes, and initiatives for cultural projects designed for older adults in Japan and abroad.

「Creative Ageing ずっとび」とは？

What is "Creative Ageing Zuttobi"?

東京都美術館は、子どもから高齢の方まで、歳を重ねてからも「ずっと」通いたくなる美術館でありたいと考え、超高齢社会に対応する事業を始めました。歳を重ねる中で、作品と人がクリエイティブに出会える、参加型のプログラムなどを積極的に作っていきます。

The Tokyo Metropolitan Art Museum—a museum that people can enjoy throughout their entire lives. With this concept in mind, the Museum has launched activities serving the needs of super-aged society. "Creative Ageing Zuttobi" will actively provide older adults with participatory programs for creative encounters with artworks.

超高齢社会に対応する美術館の実践

Museum's challenge towards a super-aged society

近年、国内外のミュージアムや文化活動では、高齢化に対するさまざまな取り組みが始まっています。例えば美術館にある作品をシニア世代と若い世代が一緒にみて、対話する異世代交流や、認知症のあるシニア世代やその家族を対象とした回想法のプログラムがあります。人とのつながりが少なくなりがちなシニア世代が増加している状況に対し、このようなミュージアムの活動は社会参加の機会を作り、健康にもよい影響があると考えられています。イギリスなどでは、病院で患者に薬の代わりに社会参加の機会を処方する「社会的処方」と呼ばれる取り組みが進められるなど、ミュージアムと介護や医療従事者の連携が広がっています。

東京都美術館でも2021年度より、シニア世

「Creative Ageing ずっとび」の特設サイトトップページ
"Creative Ageing Zuttobi" website homepage
https://www.zuttobi.com

「おうちでゴッホ展」のキービジュアル

Key visual for “Enjoy the Van Gogh Exhibition at Home”

「おうちでゴッホ展」で鑑賞した作品のポストカード（事前に参加者に送りました）

Postcards featuring paintings viewed in “Enjoy the Van Gogh Exhibition at Home” (posted to participants beforehand)

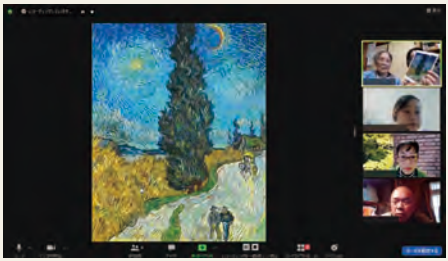
代の方々がより主体的で創造的に楽しめる機会を増やすことを目指し、「Creative Ageing ずっとび」を始めました。「ずっとび」は元気なシニア層が参加するプログラムだけでなく、アートが好きだけど身体的なハードルから美術館を疎遠に感じてしまうシニア世代に対しても、美術館での鑑賞や社会参加の機会を作りたいと考えています。

2021年の11月には、当館では初となる、認知症の方とそのご家族を対象としたオンライン鑑賞プログラム「アート・コミュニケータと一緒に楽しむ おうちでゴッホ展」を実施しました。全国各所から11組22名の方が参加し、アート・コミュニケータ（愛称：とびラー）と一緒に、「ゴッホ展――響きあう魂　ヘレーネとフィンセント」（2021年当館にて開催）の展示作品を鑑賞しながら対話を楽しみました。プログラムの概要説明を行った後、参加家族ごとに、とびラー2～3人とグループになり、オンライン上の個別の部屋に分かれました。参加者は作品を見ながら、心に浮かんだことや思い出したことについて対話を楽しみました。

プログラムの終わりには、認知症のある本人から「作品からみんなでいろいろと想像できて楽しい」などの感想がありました。また、家族の方からは「こうした取り組みが認知症の母にとって何かしらの刺激や楽しみに繋がる可能性を知りました」といったコメントが寄せられ、作品を見ながら対話を楽しむプログラムが、人々の生活の質（QOL）を向上させるような、豊かな時間を生み出す可能性を感じました。

東京都美術館は2026年に開館100周年を迎えます。国内で初の公立美術館として、さまざまな時を刻んだ「都美（とび）」ですが、これからも「ずっと」人々の心の豊かさの拠り所となれるように、クリエイティブで多様な活動を行っていきたいと思います。

（東京都美術館 学芸員　藤岡勇人）



フィンセント・ファン・ゴッホ《夜のプロヴァンスの田舎道》を見ながら話すとびラーと参加者

Participants and *Tobira* discussing Vincent Van Gogh’s *Country Road in Province by Night*

Varied initiatives for super-aging society are underway in museums and cultural projects in Japan and abroad. In fiscal 2021, the Tokyo Metropolitan Art Museum launched “Creative Ageing Zuttobi” activities serving Japan’s super-aged society to give older adults greater opportunities for self-initiated encounters with artworks. Hereafter, it will actively offer the participatory programs for creative encounters with artworks.
In November 2021, we held its first program for people with dementia and their families: “Enjoy the Van Gogh Exhibition at Home with Art Communicators (“*Tobira*”)”. Twenty-two people in locations across Japan took part from their homes using the Zoom. They enjoyed talking with art communicators while viewing the exhibition “Collecting Van Gogh: Helene Kröller-Müller’s Passion for Vincent’s Art” (Tokyo Metropolitan Art Museum, Sep 18 to Dec 12, 2021).

(FUJIOKA Hayato, Curator)

公募団体・学校教育展

東京都美術館は、年間約270団体の展覧会が開催される「公募展のふるさと」です。
美術団体や学校教育機関などが作る新しい作品との出会いの場をさまざまなトピックでご紹介します。

The Tokyo Metropolitan Art Museum is “the home of the public entry exhibition.”
Each year, some 270 groups hold exhibitions here. Visitors can enjoy encounters with new works by art groups and school education institutions, presented under a wide range of topics.

オンラインで「盆栽」入門 ―コロナ禍の文化芸術体験プログラム

Online intro to “BONSAI”—a program for art & culture during COVID-19

盆栽の剪定の様子［動画「盆栽をたのしむ」より］
Scene of trimming bonsai (video “Appreciating the Bonsai”)

「盆栽」という言葉を聞いたことがない、という方は少ないでしょう。しかし、盆栽とは何か、実はあまりよく知らないという方は多いのではないでしょうか。現在、東京都美術館の公式YouTubeチャンネルでは、そんな皆さまにぜひ一度ご覧いただきたい、「盆栽をたのしむ」という6分程の動画を公開しています。一般社団法人日本盆栽協会の鈴木亨氏を講師に迎え、松の盆栽を前に、鑑賞のポイントや育て方の基礎などをお話しいただいています。

この動画は、2018年より実施している「文化芸術体験プログラム」の一つとして制作したものです。第32回オリンピック競技大会・東京2020パラリンピック競技大会にあわせ、公募団体と連携し、海外のお客さまを含むさまざまな方に日本の文化芸術に触れていただく参加型イベントとしてスタートした同プログラム。2020年以降コロナ禍で開催困難な状況が続きましたが、昨

動画「盆栽をたのしむ」
収録の様子
Scene of recording
“Appreciating the Bonsai”

年度末、当館で毎年「国風盆栽展」を開催する日本盆栽協会のご協力のもと、オンラインでの盆栽入門ワークショップというかたちで復活をとげました。

鉢の中で、樹木を小さく、小さく育てていく盆栽の世界。中には樹齢数十年から数百年に及ぶものもあり、大切に手入れされ、先人から次の世代へと受け継がれていきます。それぞれの樹形は、日当たりや風通しを保つための剪定や矯正といった人の手と、木に宿る成長の意志とが融合して生み出されるものだとのこと。生育に欠かせないのは「水・日光・空気」の三要素ですが、それに加えて何より大事なものは樹木への「愛」ということのようです。

盆栽の魅力に、より多くの方に触れていただけるよう、動画には日本語と英語の字幕を添えています。ぜひ、ご視聴ください。盆栽のほかにも、当館では、いけばなや瓦造形、バードカービングなど、ほかの美術館ではあまりみることのできない公募展が毎年開催されています。公募棟やギャラリーで開かれている多彩な公募団体の展覧会にも、どうぞご注目ください。

（東京都美術館 学芸員　大内曜）

東京都美術館公式YouTubeチャンネル

動画「盆栽をたのしむ Appreciating the Bonsai」

□YouTube URL
https://www.youtube.com/watch?v=FRjuuwj78DU

The official Tokyo Metropolitan Art Museum YouTube channel is currently showing the 6-minute video “Appreciating the Bonsai.” The video is an initiative of the "Art and Cultural Experience Program" launched in cooperation with art groups in 2018 to give overseas visitors to the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games hands-on experiences of Japanese culture and art.
In the video, SUZUKI Toru of the NIPPON BONSAI ASSOCIATION explains the basics of how to appreciate and grow bonsai small potted trees. Carefully nurtured and passed down for generations, bonsai are known to live for decades or even hundreds of years. The video features subtitles in Japanese and English. We invite you to have a look.
Be sure to notice the varied exhibitions of other art groups at the Museum, not only bonsai but also ikebana, kawara modeling, and bird carving.

(OUCHI Hikaru, Curator)

美術情報室・
アーカイブズ

美術情報室は、図書・図録・雑誌などを閲覧できるライブラリー。
アーカイブズでは、館の歩みに関する資料を収集・整理・保存・公開しています。

A library open for perusal of reference books, catalogues, and magazines.
The Archives collect, preserve, and display materials documenting the museum's progress.

美術情報室からおすすめ図書のご紹介です

Museum and Archives Recommended Book

『デンマークの椅子』

織田憲嗣 著／光琳社出版 刊／1996年

DANISH CHAIRS

ODA Noritsugu (author) / Korinsha Press (Publisher) / 1996

19世紀半ば以降の椅子の調査、研究と収集に尽力してきた著者が、アルネ・ヤコブセン、フィン・ユール、ハンス・J・ウェグナーらのデンマークの椅子170点を紹介。前後、横、そして斜めの4方向から撮影した写真を見ていると、それぞれの椅子がどんな座り心地なのか、想像が膨らんできます。さらに、すべての作品に著者の研究の結晶ともいえる解説がつけられ、主要作品には図面まで掲載されており、資料価値の高さも折り紙つきです。

2022年7月23日（土）から開催される企画展「フィン・ユールとデンマークの椅子」では、本書に掲載されている椅子も出品されます。また、美術情報室には、本書で取り上げられているデザイナーの机や椅子が置かれています。展覧会で実物の椅子を鑑賞し、美術情報室でデンマーク・デザインの椅子に座って本書を読む。そんな、デンマークの椅子の世界にどっぷりと浸る時間を過ごしてみてはいかがでしょうか。

（東京都美術館 学芸員　髙城靖之）

The author, who actively began researching and collecting chairs in the mid-19th century, introduces 170 Danish chairs by such designers as Arne Jacobsen, Finn Juhl, and Hans J. Wegner. Views of the chairs from four angles (front, back, side, and oblique) allow readers to easily imagine the comfort offered by each chair. Accompanying the chairs is the author's insightful commentary, distilled from decades of research. Schematic drawings are also provided for many of the chairs, evidence of the book's high quality.

Some chairs featured in the book will exhibited in "*Finn Juhl and Danish Chairs*" opening on July 23 (Sat), 2022. Tables and chairs by Danish designers discussed in the book are also placed in the Library and Archives. After viewing chairs in the exhibition, read the book in a Danish chair in the Library and Archives, and enjoy an immersion in the world of Danish chairs.

(TAKASHIRO Yasuyuki, Curator)

TOPICS

Archives
アーカイブズ

開館100周年に向けた裏表紙の新コンテンツ
「あの日・あの時 Playback！TOBI」について、
スタートの経緯をアーカイブズ担当の小林明子学芸員に聞きました。

"Playback! TOBI"—new in this magazine for the Museum's centennial.
We asked KOBAYASHI Akiko,
curator of the museum, about the new feature article.

アーカイブズ資料で東京都美術館の100年を振り返ります！

Looking back on the Tokyo Metropolitan Art Museum's first 100 years!

1926年に日本で初めての公立美術館として誕生した「東京都美術館」（1943年に東京府美術館から館名変更）は、2026年に開館100周年を迎えます。

本誌の前身『美術館ニュース』は、1951年に創刊されました。都美の活動報告のほか、当時の出来事や美術界をめぐるさまざまな動向などを伝える媒体として、1997年まで継続して刊行されました。休刊を経て、2017年、開館90周年を機に『東京都美術館ニュース』と名前を変えて復刊し、著名人による美術の魅力等を伝えるインタビューや、都美のさまざまな活動情報をお届けする広報誌として新たな役割を果たしてきました。

この復刊から20号を経た今号より、裏表紙で「あの日・あの時　Playback！TOBI」がスタートします。2012年のリニューアル・オープン以降、収集、整理、保管を進めてきた館所蔵のアーカイブズ資料を通して「あの日・あの時」にスポットを当て、写真とともに都美の歩みを振り返ります。

Founded as Japan's first public art museum in 1926, the Tokyo Metropolitan Art Museum (renamed from "Tokyo Prefectural Museum of Art" in 1943) will celebrate its centennial in 2026. This magazine's predecessor, *Museum News*, launched in 1951 and continually published until 1997, was relaunched as *Tokyo Metropolitan Art Museum News* in 2017 for the Museum's 90th anniversary.
Starting in this issue—the 20th since our relaunch—"Playback! TOBI" will shed light on bygone days in the Tokyo Metropolitan Art Museum's history through photographic materials in the Museum archives.

黒沢ビル オーナー

三宅由紀さん

Owner, Kurosawa Building Management
MIYAKE Yuki

下町の風情を残しつつ、最先端の店も軒を連ねる上野界隈。今回は、昭和初期に建てられたビルを守るオーナーが人々と建築との素敵な出会いを紹介します。

The Ueno area features many trendy shops while retaining the mood of Tokyo's old downtown quarter. This time, we asked the owner of an early 20th-century building how visitors respond to its striking architecture.

不忍池から徒歩1分の場所にある黒沢ビル。ビルに入るやいなや昭和初期にタイムスリップ。玄関の小川三知のステンドグラス《鶏鳴告暁》（奥、手前はバラ）の前で三宅由紀さん

Kurosawa Building is a 1-min. walk from Shinobazu Pond. Just seeing it will transport you to early modern times. Yuki Miyake stands near the Ogawa Sanchi stained glass work in the entrance.

戦禍を乗り越えたレトロ建築・黒沢ビル
多くの人に愛され見守られる小川三知のステンドグラス

Kurosawa Building—retro architecture that survived war. OGAWA Sanchi stained glass works beloved by many.

このビルは眼科医・小川剣三郎によって1929年に完成しました。関東大震災の時に、もともとあった小川眼科医院が全焼したために建て直し、今の姿となりました。

「小川剣三郎のビルなのに、なぜ黒沢ビルなのですか」とよく聞かれるのですが、剣三郎の後を継いだのが黒沢潤三という眼科医であったことから「黒沢ビル」となりました。今も一階に小川眼科がありますが、屋号をそのままにすることを条件に眼科医院に入っていただいています。

黒沢ビルの管理を始めたのは、私の母でした。30年ほど前のことですが、当時ビルが放置されていたために管理をしようということになり、会社を設立したのです。私の祖父が黒沢潤三さんと友人だったこと、黒沢潤三さんの息子さんと私の母が幼馴染だったことなど、ご縁があったのだと思います。

9年前に母が亡くなったため、私が管理を任されることになりました。古いビルがゆえに、漏水したり天井が落ちたりと管理は思った以上に大変だったのですが、後世に伝えるためにできることを考えねばと思い、ホームページを作り、見学会を始めました。

見学会にお越しいただく方々のお目当ては、

剣三郎の兄である小川三知（おがわさんち）*のステンドグラスです。日本画を思わせる構図と色合いが注目され、近年徐々に知られてきた作家です。ここにあるのは小川三知の最晩年の作品で、戦災や度重なる地震にも耐えて残っているのは珍しいことだそうです。

最も有名な作品は玄関にある《鶏鳴告暁》という鶏のつがいの作品ですが、私が一番好きな作品は、応接室にある「流水にキセキレイ」が描かれた作品です。色合いや日本画の流水、鳥がいきいきしている様子が描かれているところが好きなんです。応接室の2メートル四方に満たない狭い空間に「ウメ」「タチアオイ」「ツバキ」「流水にキセキレイ」という4点のモチーフで四季を表現したのではないかと言われています。

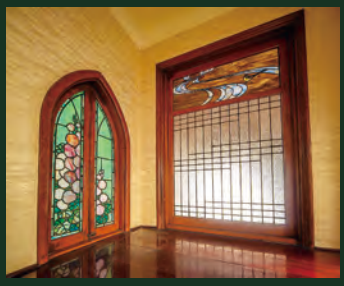
見学会を始めて嬉しかったのは、多くの方々が見てくださって、いろんな思いを持っていただいたことです。ステンドグラス愛好家の方、建築に興味のある方、写真がお好きな方などがいらっしゃいます。ある日、大雨の中見学に来られた方々が、持参されたタオルで靴を丁寧に拭いてビルに入られたことがありました。皆さんが黒沢ビルを本当に大切に思ってくださっていることが伝わってきて感動いたしました。

私の気持ちにも変化がありました。引き継いだ当時は、ステンドグラスを見ても「綺麗だな」くらいしか感じていませんでしたが、見学会でお話を伺うようになって、このビルの大切さが深く理解でき、きちんと維持して伝えていかねばならないという意識が強くなりました。

不忍通りから一本南側の仲町通りに建つ黒沢ビルですが、この地はご近所のお店も芸術への意識が高く、私も一緒にアート活動を盛り上げていきたいと考えています。見学会はコロナ禍でお休みをいただいていますが、再開しましたらぜひお越しいただきたいと思っております。

＊小川三知（1867-1928）は、大正～昭和初期に活躍したステンドグラス作家。東京都美術館の旧館内装のステンドグラスも手掛けた。取り壊しの際に外され、現在はアーカイブズ資料として大切に保存されている。

This building was constructed in 1929 by ophthalmologist OGAWA Kenzaburo. It became the “Kurosawa Building” when ophthalmologist KUROSAWA Junzo succeeded OGAWA.
My mother started managing the Kurosawa Building about 30 years ago. She died, and nine years ago I took over the administration. Managing a leaky old building with collapsing ceilings was difficult, but I felt responsible for passing it on to future generations, so I created a website and began offering guided tours.
People come for the tour to see the stained glass works by artist OGAWA Sanchi, Kenzaburo’s older brother. Sanchi’s works have drawn attention in recent years for their compositions and colors reminiscent of Japanese paintings. There are eight works from his late years, the most famous being *Keimei Kokugyou*, a scene of a rooster and hen, installed in the entrance.
In the tiny, less than 2x2m drawing room are four works whose motifs are thought to represent the four seasons.
What made me happy when I started the tours was that all the visitors had their own different thoughts. Some people visiting during a heavy rain, one day, carefully wiped their shoes with towels they brought, before entering. I was moved to see how much everyone values the Kurosawa Building.
My attitude also changed. Listening to discussions during the tour, I became more deeply aware of this building’s importance and the need to properly maintain it and tell people about it.
Currently the tour is closed because of COVID-19, but I hope you will visit when it resumes.



応接室の四面には、四季のステンドグラスが設えられ小川三知の魅力が凝縮している。入口ドアの上は「ウメ」、正面には「ツバキ」、応接室に入り左手に「タチアオイ」、その右隣には、三宅さんの一番好きな作品「流水にキセキレイ」。「小川三知は鳥を本当に上手に描きますね」と嬉しそうに語った

Seasonal stained glass works on four sides of the drawing room fully display Ogawa Sanchi’s appeal: “Plums” above the door, “Camelias” on the front wall, “Hollyhocks” on the left wall, and *Grey Wagtail in a Stream*, Ms. Miyake’s favorite, to the right of that.

あの日・あの時 Playback! TOBI

※東京都美術館は2026年に100周年を迎えます。

東京都美術館（1943年に東京府美術館から館名変更）は1926年に開館しました。建築家・岡田信一郎の設計による建物の建設工事は1924年9月に始まり、翌年4月5日に行われた定礎式では、設立資金となる100万円を寄付した佐藤慶太郎らの同席のもと、定礎記念箱が礎石の前に安置されました。この箱の中には、建設の由来や関係者の名前が刻字された銅版が収められていました。式で用いられた金の鏝（こて）と槌（つち）は、鋳金（ちゅうきん）工芸作家の香取秀真（かとりほつま）によるもので、現在も当館のアーカイブズ資料として残されています。写真中央に立ち、式辞を述べているのは宇佐美勝夫東京府知事、最前列には佐藤慶太郎、後列右から三人目に岡田信一郎、四人目に東京美術学校の校長正木直彦が座っています。（米岡響子）

東京府美術館定礎式（1925年4月5日）

Tokyo Prefectural Art Museum cornerstone ceremony (April 5, 1925)

The Tokyo Metropolitan Art Museum opened in 1926. Construction began in September 1924, and a cornerstone ceremony was held on April 5 the following year. At photo center is Tokyo prefectural governor USAMI Katsuo giving the ceremonial address. Seated in the front row is SATO Keitaro, who donated one million yen as start-up capital for the Museum. Seated in the back row are the building's architect, OKADA Shinichiro (third from right), and Tokyo Fine Arts School director MASAKI Naohiko (fourth from right).
(YONEOKA Kyoko)

東京都美術館ニュース No.471

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

発行日 2022年6月30日

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館

企画・編集 東京都美術館 広報担当

デザイン 株式会社ファントムグラフィックス

翻訳 アムスタッツ コミュニケーションズ

印刷 望月印刷株式会社

©Tokyo Metropolitan Art Museum

＊掲載情報に変更が生じる場合がございます。
最新情報は公式サイトでご確認ください

東京都美術館
〒110-0007
東京都台東区上野公園8-36
Tel 03-3823-6921
Fax 03-3823-6920

公式サイト
https://www.tobikan.jp

Twitter
tobikan_jp
tobikan_en

Facebook
TokyoMetropolitanArtMuseum

表紙の作品

左上：フィン・ユール《イージーチェア No.45》1945年、
左下：《ボーンチェア No.44》1944年、
右上：《ジャパンチェア》1957年、右下：《チーフテンチェア》1949年
※年代はデザイン年 いずれも織田コレクション（東川町）撮影：大塚友記憲
Finn Juhl, *Easy Chair No.45*, 1945;
Bone Chair No.44, 1944, *Japan Chair*, 1957; *Chieftain Chair*, 1949,
Oda Collection, Higashikawa Photo: Yukinori Otsuka

VEGETABLE OIL INK

ミックス紙 FSC FSC® C138625